

mail magazine
noichi

no.44_january 2015

Published by an e-mail magazine editorial department.
All rights reserved. © utanoichi okuda. No part of this publication may be reproduced without the written permission of the Publisher.



第四十四号

「追悼 唯是震一（上）」

メルマガnoichi44号、今月のメルマガは『追悼 唯是震一（上）』とさせて頂き、
奥田雅楽之一から祖父に捧ぐ追悼文を掲載させて頂きます。



平成二十七年一月五日、最愛の祖父、唯是震一が永眠致しました。

十三日に青山葬儀所にて葬儀・告別式を執り行い、滞りなく済まされました旨を此処にご報告申し上げます。また式の際には沢山の方々にご参列頂きましたこと、また多くの方からお力添えを頂きましたこと、遺族にとりましてこんなに勇気づけられることはありませんでした。そして故人に弔辞を賜りました本田敏秋様、朝香誠彦様、今藤政太郎先生、矢崎明子先生、坂東玉三郎丈（進行順）に心からの感謝を申し上げます。



げます。

唯是震一、享年九十一歳。私は祖父に対する熱い想いが未だ冷めず、今の時点で何をどう表現してよいか判りません。今回はただひたすら思い付くがままを綴り、個人的な懐古に浸ることをお見逃し下さい。

私が生まれた時には既に父方の祖父は他界しておりましたので、私にとつての「おじいちゃん」は唯是震一ずばりその人でした。不思議なことに、幼少時は祖父が作曲家であるとか、演奏家であるという認識はなく、ただ、祖父の強烈な印



象だけをいつも全身で感じていました。あの大きな声で、例えば突然英語で話し掛けられたり、そこに咲いている花の名前を漢字で書けるか確認されたり、とにかく油断の出来ない人だったので、一緒に遊んでもらったというより、長い授業を受けているような感覚で過ごしました。かえって、私がこの道で生きていくと決意してからのの方が色々な話をするようになり、お稽古や舞台を通じて祖父の中にある真実に触れられた気がします。月に二回あった唯是スタジオの稽古日は祖母が手作りのお弁当を二つ作って私に持たせてくれました

[↓次ページにつづく](#)

が、出がけに祖母が「今日は何をお稽古して頂くの？」と必ず聞くので「○○です」と答えると「しっかりと教わってらっしゃい」と、どこか嬉しそうに言ってくれる祖母の顔が私は好きでした。祖母は私がこの世界に入る切っ掛けであり、その全責任を背負ってくれた人ですが、私が男の子である以上どうしても男性の師、つまり唯是震一に習わせる必要性を感じていたのだと思います。祖父は箏曲界における理論派の第一人者でありましたが、芸に関しては論理的というより直感的、特に音程、音色、曲の運びなどに厳しい人でした。一度スイッチが入ってしまうと納得がいくまで許してもらえないので、そういう時に居合わせたら運が悪かったと思うしかありませんでした。忘れてしまう前に、祖父が亡くなった日のことを書いておきます。一月五日朝の六時半頃、酒井帥山



さんから私の携帯に連絡があり、血圧が70台にまで下がり危険な状態に陥りました、と。私は直ぐ病院に向かい、七時前に一番乗りで病室に着きました。せめて祖母たちが来るまでは…と思い、無我夢中で祖父に呼び掛けました。おじいちゃん！おじいちゃん！唯是先生！三十分くらいして、妻である靖子、次女の雅枝、酒井さんが到着、それから長女の一子、姪夫婦である伊藤俊一・孝子夫妻、友人の小島敏男・玲子夫妻、実姉である禮子、付き添いとして新見雅晃、続々と病室に到着し、交代で祖父に話し掛けて奇跡を信じました。祖父に私たちの言葉が届いていたのか、いなかったのか、結局私が歌舞伎座の『黒塚』に出掛ける夕方四時頃まで昏睡状態が続きました。

「おじいちゃん、黒塚に行つてきます」

私はそう言い残して、病室を離れました。

その日は当初祖母と一緒に黒塚に出演する予定でしたが、祖母は出演を見送り代役を一人立て、私が祖母に代わって急遽独奏部分を務めることになりましたが、実は私が黒塚で箏曲の立て（タテ）を務めるのはこの時が初めて。突然のこととはいえ、我が人生、この時ほど責任の重みをズッシリと感じたことはありませんでした。ましてや病院からいつ連絡がくるのかも分からない状況下だったので、楽屋では気持ちを落ち着けることだけに集中しようと努めました。舞台上上がると、座る位置はいつもと数十センチしか違わないのに、景色、心境はまるで違うものでした。祖父母が長年背負ってきたもの、守ってきたものが何であったのかを感じた瞬間でもありました。舞台をなんとか務め上げ、大きな責任から解放されて楽屋に戻った時、叔母の雅枝さんからのメールを確認しました。「おじいちゃん、亡くなりました」夜の七時五十四分、私が舞台に向かうその時刻でした。メールを見て、一瞬、ニッコリと笑った祖父の顔が頭を過ぎり、私はこみ上げてくるものをぐっと堪え、心の中で目一杯の感謝を祖父に伝えました。

「ありがとう、ありがとう、ありがとう。おじいちゃん、ありがとう！」

人生には不治の病から助かることの奇跡があるかもしれないが、肉体の苦しみから解放されて天国へ召されることの奇跡もある。そのようなことを感じた祖父との別れでした。

自分の袴を畳み終えると、さあ一秒でも早く祖母のところへ行かなきゃと思いい、歌舞伎座から一直線、私は祖母が待つ病院へ戻りました。

合掌 奥田雅楽之一

◎あとかぎ◎

才能には大きく分けて2種類あると思う。早熟で最初から完璧な作品でデビューし、短期間で時代を駆け抜けて行く天才型。モーツァルトやマイケル・ジャクソンなどはこのタイプで、天才型はたいいてい三十代後半から五十才くらいまでに亡くなってしまう。また、このタイプの特徴としては、はじめから完成されているためか、初期の作品をなかなか超えられなくて苦悩する場合が多い。

天才型とは対照的に、長い時間をかけて大きな山をなぞるようにゆっくりと成長を続け、誰もが見上げるような高みにいつの間にか達しているスケールの大きな才能は巨匠型。若いころはへたくそと言われながらも六十過ぎてから代表作を残した北斎、一生自分のスタイルを追い続けたピカソ、黒澤明など、このタイプは作品数の多さが特徴でもある。音楽家にはこのタイプはいないのかと調べてみたが、ストラビンスキーくらいしか見あたらなかった。作品数が多く子だくさんでも知られるバッハですら六十代で亡くなっているようだ。唯是先生はその大きなスケール感と作品数、亡くなった年齢など、音楽家には珍しい典型的な巨匠型だった。ご冥福をお祈りします。

グラフィックデザイナー (http://www.1938.jp) みやはらたかお

